

アラウンド GOGO 55

「たまたま」考えた

小淵隆司



北海道に移住して、自然や世の中には、わからないことや知らないことがほとんどで、知っていることなどほんの少しなんだなあ、と実感している。これまでこんな当たり前のことを考えたことはなかった。それを感じる事ができなかったからだ。

4年前、単身赴任した釧路の自然に、「感じなければ考えられない」ことを気づかせてもらった。季節によって沈む夕陽の位置がこんなにちがうことに驚き、雲が創造する夕暮れのグラデーションをボーッと眺め、氷点下の快晴に現れるキラキラ光る霧氷に目を見はらせる。

これらは、自然のある条件によってたまたま生じた現象

である。しかし、これらは意図しても創ることができないと考えたなら、その一瞬に出会えたことも「たまたま」のことだと思うと嬉しくなってくる。話は南へ転じて、イリオモテヤマネコの保護についての学習参観で西表島へ行った時のこと、仲間川の、河口から吹く生あたたかい風と上流から吹いてくる川風の涼しさを体の前と後ろで同時に感じた。こんな一瞬も初めてだった。

物事や行動、事象には案外「たまたま」ということも結構あるのではないか。「たまたま」「何となく」から始まることも結構大事だったりする。しかし、たまたまはたまたまのままでは終わらない。実

はたまたまのようにみえるが、たまたまではない。

今、僕は、身のまわりの様々なことへの「センス・オブ・ワンダー」で溢れている。薪割りや薪運びをしては自分の体や力に向き合い、身をもって体験することに喜びを感じている。蜂が採蜜するしくみを学び、それを実際見たくなった。近所の養蜂家さんのところに迷惑にならないように弟子入りさせてもらおう、と考えては楽しくて仕方ない。それによって、車を運転している時でさえ、蜂箱を見つける目になっていくのだ。

最近では、学生からも「いつも楽しそうでいいですね」と言われ、また嬉しくなっている。(北海道教育大学釧路校)